

100周年記念号の刊行にあたって

経済学部長 鈴木 豊

2020年は、法政大学経済学部にとって創設100周年となる記念すべき年であり、「100周年記念事業」を重要な事業として位置づけ、委員会を設けて事業計画を進めてきました。

ご存知の通り、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、100周年事業についても、計画を修正せざるを得ない部分が生じてしまいましたが、その中でも、各方面からご協力をいただきながら、最善の対処を追求してきました。

春学期には、経済学部OB・OGによるリレー講義を、「OBOGから学ぶ自由を生き抜く実践知」というテーマで、オンライン講義ながら盛況のうちに実施しました。また、10月31日には、当初の計画よりも規模を縮小せざるを得なかったものの、「100周年記念ビデオのお披露目」と「100周年記念学生プレゼンテーション大会」の二つを軸とした「記念式典」を市ヶ谷キャンパスにて実施することができました。これらについては、大学のHPやYou Tubeでも公開していますので、ぜひご覧ください。現職の教職員、名誉教授の先生方、そして卒業生の方々の「100周年への思い」は、村串名誉教授を中心に編集した経済学部同窓会（経友会）の「100周年記念誌」として刊行されましたので、そちらもご覧くださいませ幸いです。

さて、100周年事業の最後を飾るのが、この「経済志林100周年記念号の刊行」です。100周年ということで、現在までの経済学部の歴史を簡単に整

理してみましょう。法政大学は1920年に大学令によって名実ともに大学になり、その時、経済学部も設置されました。1950年代には大内兵衛総長の下で「われらの願い」が作られましたが、当時の教育研究の拠点は市ケ谷でした。60年代以降の学生運動の激化などもあり、経済学部は多摩移転の決断をします。84年の移転後は、一部が多摩、二部（夜間）が市ケ谷という2部体制が2000年代初頭まで続きましたが、その後、二部を廃す代わりに国際経済学科（01年）と現代ビジネス学科（05年）を新設し、3学科体制となりました。定員は合計876名（2020年現在）と学内一の規模で、財政的な意味でも大黒柱の学部となっています。

現在の経済学部は、「多様化する経済の動きを広い視野で捉え、グローバルに活躍できる経済人を育てる」という理念の下に教育研究活動を行っています。専任教員は76名で、ミクロ経済学、マクロ経済学、国際経済学、財政学、金融論などのスタンダードな科目のほか、ゲーム理論やファイナンス、計量経済学など、先端分野も充実しており、会計、経営、法学など実学系の科目も、豊富にそろっています。グローバル化対応では、国際経済学科の一部科目は英語で授業をしており、また、2018年から英語学位プログラム（IGESS）も始まり、日本語学位コースとの相乗効果も期待されています。特筆すべきことですが、外国語や総合教育科目などの専任教員も26名在籍していて、多様性の育成に貢献しています。

今回の記念号の執筆者も見て、本学部出身で、他大学で教員をしている方も多数含まれていますし、研究分野も、経済学の狭い専門領域に限られているわけではなく多種多様です。それだけ「教育研究を通じて社会に貢献できる人材」を輩出する教育研究力を学部として維持してきたということですし、多様な研究スタッフというのは、教育研究上はもちろん、『経済志林』のような学部紀要の質を維持して行く上でも重要だと思います。

今後の学部の教育研究を考えていく上でも、教育研究スタッフ（専任教員）の充実が全ての基礎となりますので、学問の潮流を見極めながら、年齢構成の均整化や基幹科目の継続性にも留意し、業績審査をしっかりと行

って質保証をしつつ、スタッフ構成が循環するよう組織編成を図っていき
たいと思います。

